読売新聞
（第三種郵便物認可）　2006年（平成18年）11月8日（水曜日）

ウイークリー時評

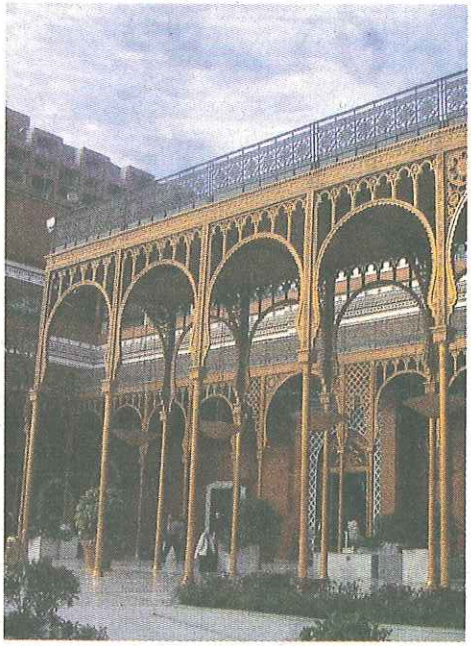
ゲジーラ宮殿 ■ エジプト〝鹿鳴館時代〟の象徴

池内 恵

エジプトに行くのは今年もう三度目である。勤務先とカイロ大学が共催でシンポジウムを行うのだが、準備のため一足早くカイロ入りした。仕事の都合上、街の中心部、ナイル河の中洲ゲジーラ島の高級住宅街ザマーレク地区にあるマリオット・ホテルに泊まっている。このホテルは1869年にエジプトの支配者イスマーイールによって建てられたゲジーラ宮殿を改造したもので、設備は最新とは言いがたいが、歴史が醸し出す格式は捨てがたい。

この宮殿が中東の歴史劇の舞台となった時代がある。トレヴァー・モスティン著『エジプトのベル・エポック』（ロンドン、I・B・タウリス社、二〇〇六年）を手に、エジプトの挫折したモダニズムを偲ぶ。イスマーイールはナポレオン三世治下のフランスでオスマン男爵が行ったパリの都市計画・改造に倣って、カイロを作り変えようとした。このカイロ改造は、1869年のスエズ運河開通に間に合わすべく、急速に進められた。開通式に集まる来賓たちのためにカイロ・オペラ座が建てられ、ここで初演すべくヴェルディに「アイーダ」の作曲が依頼された（ただし開通式には間に合わず、「リゴレット」で代用した）。

スエズ運河開通式の主賓はナポレオン三世の皇后ウージェニー。美貌を謳われ西欧社交界の中心にいた。このウージェニーを迎えるために、宮殿とそれを囲む庭園を造り、その中にパリのチュイルリー宮殿のウージェニーの寝室を丸ごと模した部屋まで作ってしまった。それがゲジーラ宮殿である。エジプトの「鹿鳴館時代」の象徴といえよう。



エジプトの挫折したモダニズムをしのばせる、カイロのマリオット・ホテル＝筆者撮影

1869年のスエズ運河開通はエジプトの欧化主義のクライマックスだったが、それは同時に凋落へ向かう第一歩でもあった。不吉なことに、ウージェニーの夫ナポレオン三世は翌年普仏戦争に突き進んで敗れ、第二帝政と共に皇后ウージェニーの地位も消滅する。仏軍敗走の知らせに、ウージェニーは公然と夫の臆病をなじったという。

一方イスマーイールも運河や都市改造と軍事遠征、そして宮廷生活の濫費で国家財政を破綻させ、英・仏による支配を招き入れ、1879年には退位を強いられた。病を負い、亡命先を転々としながら、名目上の宗主国だったオスマン帝国スルタンの慈悲にすがった。カイロ・オペラ座は、ヴェルディのアイーダを初演した1871年からちょうど100年後の1971年に不審火で消失した。ゲジーラ宮殿は人手に渡ってホテルとなり、幾度も名前を変えた。現在は巨大なツインタワーを加えて「中東最大のホテル」となっている。

ウージェニーは皇后の地位を追われてから50年も生きた。依然としてフランス皇后であるかのように遇してくれる西欧貴族社会の親類縁者を巡り歩いた末、1920年に94歳で世を去った。1905年、79歳の時にもエジプトを訪ね、アブ・シンベルの神殿付近で船上からヌビアの大地を眺めているところを目撃されている。

（国際日本文化研究センター助教授、中東研究）